

拓く

健康づくりの
現場から 30



パラシュートを使った「キッズスポーツひろばwith」の様子(上)、クラブマネジャーの近藤裕紀氏(右)

総合型地域スポーツクラブを 設立し、地域のニーズに 応じたプロダクトを提供する

NPO法人スポネット弘前

NPO法人スポネット弘前は、「スポーツで創る元気なまち」をめざして、総合型地域スポーツクラブを設立。地域のニーズを掘り起こして、サークル事業や各種定期教室の開催、出前講座、スポーツボランティアの育成など多彩な事業を展開している。ニュースポーツの普及にも力を入れており、参加者は拡大している。

スポーツを楽しむ環境をつくるため 総合型地域スポーツクラブを設立

NPO法人スポネット弘前(青森県弘前市。以下、「スポネット」)の設立(認可取得)は平成17年4月。スポネットの前身は、14年に設立された中学生を対象とする弘前バスケットクラブ。このクラブは、翌年、学校の部活動になるが、ここでの指導を通じて、コーチたちはスポーツをした子どもは大勢いるが、レギュラーになれず練習させてもらえない、時間や場所がなくてできない子どもが

多くいることを知る。子どもの体力の低下、スポーツをする・しないの二極化も見られた。これが総合型地域スポーツクラブ(以下、「クラブ」)設立のきっかけになった。

クラブマネジャーの近藤裕紀氏は、「スポーツをしたくてもできない環境にあるのは大人も同じで、だれもが楽しめる場が求められていた。そうした場としての可能性をもつのがクラブ」と話す。近藤氏がクラブにかかわり始めたのは、弘前大学の学生のところからだ。

地域の課題や住民のニーズを 把握し、やれることから始める

スポネットには「スポネット弘前三か条」がある(表1参照)。とりあえずやろうという強い思いと勢いで設立。止まって考えるのではなく、走りながら前に進んだ。クラブ設立に向けて、さまざまな取り組みをしてきた。

まずは地域の現状把握。同じ思いをもつ有志が集まり、自分の周りの課題やニーズをつかむためのワークショップを開催した。ワークショップでは、クラブのめざす理念・目的を

話し合い、共有化を図った。仲間を見つげるために、イベントの開催やネットワークの活用を図り、設立準備時のメンバーは30名余になった。学生を含む20

表1●「スポネット弘前三か条」

- 走りながら考える
- 議論よりもアクション
- 実践の継続と小さな失敗と成功の積み重ね

またメンバーの中には、市主催の「青年プロジェクト塾(1年間)」に参加して、スポーツによるまちづくりを学んだ者や、県や文科省が行うクラブマネジャー養成講習会に参加し、クラブについて学んだ者も多々いる。スポネットの活動は、16年4月から開始された。バスケットボール、テニス、ニュースポーツ、イベントの4部門で、企画立案や参加者募集など「ほとんどゼロからの出発」で苦労もあつた。同年5月には、県補助事業「キッズスポーツひろば」(後述)を受託し、活動に広がりや弾みがついた。そして、平成19年5月には、クラブを立ち上げた。近藤氏は、クラブ創設



キンボールを使っでの親子レクリエーション

時の活動で最も大切なことは、「最初から完璧を求めず、やれることから始めること」と話す。また、常に活動の核となるメンバー（スタッフ）がいることや、会費の設定が適切であることも重要だという。法人格は、社会的信用を得るために取得した。

ニユースポーツや出前講座でオリジナリティを出す

クラブは、①子どもたちの健全な育成と個性を伸ばす活動の支援 ②地域のニーズに沿ったスポーツプログラム ③スポーツによる健康づくりを目指したスポーツプログラムの

提供 ④交流の促進の場の提供 ⑤

スポーツに関する地域の情報提供 ⑥スポーツ活動の基盤活動拠点 ⑦スポーツネット弘前の組織体制の強化と人材育成 ⑧スポーツボランティアの育成をミッションにしており、実施事業は多彩だ。

運動プログラムは、「ニーズがある↓指導者を探す」あるいは「指導できる人がいる↓事業化する」形で拡充してきた。現在、定期活動として、サークル部門7と教室部門6の計13部門がある。小・中学校や公共施設等を活動場所に、各部門ほぼ週1回のペースで開催。21年度は11部門だったが、開催数は全661回、延べ参加者数は1万825名に上っている（表2参照）。

定期活動の特徴は、室内テニスの「ララトラケットテニス」、レクスポーツの「キッズスポーツひろばwith」、室内で行うミニサッカー「個人参加型エンジョイフットサル」（以上、サークル）や、空気スポーツ刀を用いる「スポーツチャンバラ教室」など、子どもも大人も気軽に楽しめるニユースポーツが多くそろっていることである。

表2●NPO法人スポネット弘前の事業実施状況(平成21年度)

| 区分 | 内容 | 開催回数 | 参加者数 |
|------------|--------|-------|----------|
| 定期活動*1 | サークル部門 | 全402回 | 延べ6,872名 |
| | 教室部門*2 | 全259回 | 延べ3,953名 |
| イベント関係 | 主催事業 | 全5回 | 延べ3,500名 |
| | 派遣事業 | 全33回 | |
| | 参加事業 | 全17回 | |
| totoくじ助成事業 | 教室系 | 全138回 | 1,539名 |
| | 広報事業 | — | — |

*1:参加者数にスタッフおよび体験者の人数は含まない。
*2:22年度はtotoくじ助成事業で実施した教室系事業が教室となり、教室部門は6事業。

「ウルトラ☆キッズアスリート」は、走り方など運動に必要な基礎・基本を習得する子ども教室。16年から始まった「キッズスポーツひろばwith」は、子どもの居場所づくりが目的だが、ニユースポーツを中心にいろいろなスポーツを体験して生涯続けられるスポーツを見つけてもらおう場でもある。「10年後、20年後の子どもたちの未来」を見据えた活動を大切にしている。

定期活動の参加者(会員)は、サークル部門は毎回100〜200円、教室部門は月謝制で月1000〜2500円の参加費を負担する。また、求めに応じて地域に出向いて、ニユースポーツや親子体操などのスポーツレクプログラムを提供する「出張プログラム・出前講座」を実施しており、おおよそ年25件(1か所100名程度の参加者)のオーダーがある。

このほか、花見やスポーツ交流会などの会員交流会、スポーツフェスティバルの開催、地域イベントへの参加、指導者や保護者のためのスキルアップ講習会や医学講習会などの各種研修会・講習会の開催を行っている。指導者・保護者スキルアップ講習会は、現在年1回の開催だが、今後は月1回にし、参加できる機会を増やしたいと考えている。

正会員みんなで情報共有し 支えるフラットな組織体制

クラブの会員数は年々増加しており、21年度の登録者数は514名。男女ほぼ半々、幼児から60歳以上高齢者まで各年齢層にわたるが、小学生と一般成人がそれぞれ4割を占めている。

会員には、①スポーツを楽しむことを目的に活動に参加する「サークル会員」(年会費は中学生以下2000円、高校生以上大人3000円。家族2人目より割引制度あり) ②クラブの運営・管理にかかわる「スタッフ会員」(高校生以上。年会費3000円) ③援助を目的とする「サポート会員」(個人1口5000円、団体・

法人1口1万円)の3種類がある。スタッフ会員は現在76名おり、スポンストを支えている。

組織体制は、組織の規模に応じて改革されてきた。22年8月現在の組織は、理事会(16名)、マネジメント委員会(10名。クラブ運営について協議)、広報委員会(7名)、スタッフ会(全スタッフ。スタッフ間の交流と情報共有)、部門代表者会(各部門の代表者13名)を置く。動きやすく、会員・スタッフの声が反映しやすいフラットなしくみである。

事務局は、60㎡ほどのオープンスペースをもつクラブハウス(民間賃貸)を他団体とシェアしており、クラ



活発な意見交換の場であるスタッフ会

ブマネジャーが職員として常駐している。組織間のつながりのため、総会に付議すべき事項や事業の執行に関する事項を決める理事会のメンバーの中には、マネジメント委員会から1名、広報委員会から1名、部門代表者会から2名、スタッフ会から1名、事務局から1名が参加し、情報を共有している。

クラブの運営上のポイントは、スタッフの主体性、モチベーションだという。全スタッフが理念・目的を共有し、モチベーションを上げていく

ことが必要だ。このため、月1回開催のスタッフ会のほか、スタッフ合宿(年1回、1泊)を実施している。また、会員アンケートによる満足度やニーズ調査、ワークショップによる事業評価を実施している。

クラブの22年度予算額は1200万円。活動エリアは弘前市(人口約18万3000人)全域である。組織が拡大し、出前型事業が増えるなか、実動スタッフの負担が増えており、負担軽減、組織間の協力・連携、情報共有のための組織改革を23年度に予定している。

スタッフに人材は少なくない。近

藤氏は、レクリエーション・インストラクターやSAQインストラクターの資格を所持し、そのほか健康運動指導士や、競技スポーツ指導資格をもっている人もいる。しかし、定期活動以外の事業運営もしてもらうための人材確保に苦労しているのが現状。どこまでがボランティアか、スタッフのあり方や人材確保策が課題になっている。

地域から必要とされる クラブになるための要件

スポネットでは、地域づくりにおけるクラブの役割として、①透き間をうめる・つなぐ・支える・新たに生み出す役割 ②地域のニーズに応じたプログラムの提供 ③スポーツ活動以外にも地域に発信する事業を重視している。今後について近藤氏は、「市民がスポーツや健康的な生活習慣をもち、交流を深めて心身ともに健康になり、元気なまちをつくることが目標。競技スポーツを含めて、弘前市におけるすべてのスポーツ情報を提供できるようにしたい。各種団体と連携し、クラブの可能性を開きたい」と考えている。